

針葉樹会報

A black and white photograph of a person with a backpack crossing a rocky stream. The person is on the left side of the frame, leaning forward and stepping across rocks. The stream flows from the top right towards the bottom right, creating a small waterfall. The background shows a forested area with trees and a rocky bank.

1988.10. 第72号

表紙写真説明

大菩薩 小室川谷

(撮影・倉知 敬)
一九八七年八月



発行日 1988年10月10日	針葉樹会報 第72号	編集人
発行所 針葉樹会		〒167 杉並区南荻窪
印刷所 篠田印刷		3-29-23
		引地 真



目次	
ひとのいない山(その二)	望月 達夫…2
平川氏追悼山行	斎藤 正…5
書評『藪山辿歴』 <small>やぶやまてんれき</small>	山本健一郎…7
甲斐駒から光	佐藤 恭…8
インカ・トレイル	斎藤 誠…12
会報報告	…16
住所変更および名簿訂正	…19
編集後記	…20

ひとつのいない山（その二）

望月 達夫

○明神ヶ岳 一五九四・五米 一・五万図「五十里湖」「湯西川」

明神と名付けられた山や峠を『日本山名辞典』で調べると、三十数座も数えられる。明神とは「神を尊んでいう称」と『広辞苑』にでているから、神さまを祀った山という意味かと思う。

数ある明神という名の山のなかで、前穂高に続く明神が二九二〇米と一番高く、あとは大して高い山はない。しかし、明神と名の付く山には、とがった形の山が幾つか目につく。ここに述べようと思う明神ヶ岳は、五万分の一図「川治」のほぼ中央に位置する山（一・五万分の一図なら「湯西川」で、標高は、一五九四・五米、私などは栗山の明神と言って他と区別することもある。

この山については昭和五十三年刊の『静か

なる山』にも載っていて、われわれの仲間の人か登っているし、その後『奥鬼怒山地

―明神ヶ岳研究―』という本も出ているので、いまでは珍しい山ではなくなっている。

私が最初に出かけたのは昭和四十四年三月で、藤島、近藤、村尾、川崎さんらと同行したが、湯西川温泉に泊った晩から時ならぬ春の大雪に見舞われ、山へ取りつくことなく引返した。次は昭和五十九年九月に栗山沢から西川明神尾根に取りついて登ろうとしたが、尾根に取りつく個所を見すごし、本流をだいぶ奥までつめてしまったため時間切れとなり、その時も登りそこねた。その後一時機会がなく過ぎたが、昭和六十一年十月に会津鬼怒川線が開通し、その両側の山々に眼がむけられるようになって、また登ってみようと思うにいたった。

もう三十年ぐらい前、荒海山に登ったときや、その後同じ五月上旬に万才越から枯木山に登ったときなど、いつもこの山を間近かに見ている、登りたいと思った記憶は、いまに忘れがたい。

去る五月四日（昭和六十三年）、中三依なかつみよりの民宿からT君の車で栗山沢の落合まで行き、そこを出たのが八時五十分、総勢はO君をリーダーとして七名。

栗山沢も途中までは釣人や山菜採りが入るようだし、この日も落合付近の小広い所に簡易テントを張り、朝食中の家族づれがいた。沢をあちこち渡り、ゴルジュは前と同様に右岸をへずって行けた。沢が左に曲がると広々した河原となり、目指す明神ヶ岳の頂は見上げる空の彼方に高く、その左に西川明神（日向明神とも・一五一八峰）が見えたが、共にまだかなり遠く感じられた（そこからの高度差は約九〇〇米）。

本流とイノシシ沢（左）の二股に着いたのは十時、一息いれてからその中間の西川明神尾根に取りついた。のっけからひどく急な尾根だが、身の丈ほどの笹藪なので、それにつかまりながら攀じ登ると、伐採時の古い踏跡

が分かるようになった。両側の笹や木の幹をつかんで登らないと、ずり落ちそうな勾配だ。帰りのため所々に赤布をつけナタメを入れた。

一時間強で古い伐採小屋の跡についた。その辺から傾斜がややゆるくなり、その上の古い架線の残置されていた地点で小休止。苦しい登りを慰めてくれたのはニオイコブシの白花と、足許のイワウチワの花だった。

そこからさらに三十分、きつい登りを続けて、西川明神の峰がかなり近く見えるようになった所で腹ごしらえをした。昼食の休み三十分で元気を取り戻し、また急登を喘ぎ登ったが、西川明神の笹に蔽われた頂きまで一時間半を要し、時刻はすでに二時になっていた。

日光の山々や男鹿山塊を眺めながら、前進するかどうかO君と相談したが、幸い日の永い季節でもあるので、ここから空身で、とも角行ける所まで行ってみよう、ということになった。

実は、私は前の日に芝草山(△一三四一・六米)へ登って、まだ疲労が残っていた。その日は午前三時半に起床して、東武浅草から乗車、中三依から歩き出して八時間半位の行動をやったのだが、やはり七十歳を過ぎると

情けないことに、その程度のことでも少々疲れがとれなくなった。殊に昨年、家内が大病したので年間十数日しか山歩きをしていないためと(それ迄の約三十年間は、年間四十日、九十日ぐらい山歩きを続けてきたが)、看病やら心労やらが重なって、この一年間は体力が一段と低下した。

もつとも、こんな泣き言をいっていたのは、私より十歳以上も年上の近藤恒雄先輩には会わせる顔がない。八十六歳のこの先輩は、先頃も残雪の安達太良を夔鑠と登られたと聞いている。近藤さんの登りっぷりを見ると、カクシヤクとはもう少し衰えているのをいうのではないかとさえ思えてくる。

こういう元気で丈夫な大先輩がおられる針葉樹会は、まことに有難い存在だ。五十台、四十台、いやもっと若い会員や山岳部員は、自分が八十歳を超えたときのことを考えてごらんになると、八十六歳の近藤さんの山歩きが、どれだけ大変なことがわかるだろう。そのような体力、脚力、気力は、とても一朝一夕で出来るものではないのである。

さて、話が十分横道に脱線したが、明神ヶ岳の方に戻そう。私は自分の体力を省みて、

ここ迄、即ち西川明神の頂きで停止しようかとも思ったのだが、いま登らなかつたら恐らくもう再登の機会はあるまい、あと精々往復一時間半ぐらいの頑張りだろうと判断して、

一行に従うことにし、数分後には腰を上げた。かすかな踏跡が笹のしげみの中に認められ、黒木の尾根にかかるそれがはっきりしてきた。間もなく高度差四〇メートルの急降を終えると、笹の尾根となり、右の栗山沢のツメには残雪がかなりあった。暫らくゆるい登りを喘ぎ登ると、遂に最後の急登がひかえていた。ここまできると、もう何が何んでも引返せない。一步々々足を踏みしめ、息を静めながら藪に蔽われた尾根を登りきると、笹の生えた小広い山頂に二等三角点の標石を見出した。苦しい登りの連続だっただけに、同行の諸君の喜びも大きかったであろう。

誰かが持参した缶ビールを回して乾杯した。西川明神から四十五分、登り口からは六時間かかった。山頂には人工的なものは一つもなく、途中で僅かに認めた古いナタメから判断しても、近頃はあまり人が登っていないようだった。

帰路の時間も考えて、われわれは十五分で

滞頂を切り上げ、三時五分に山頂をあとにした。西川明神まで三十分、そこには北根明神という木祠があると古い本に書いてあるが、いまはなくなっていて、図根点のような四角い石だけが唯一の印だった。十分休んで下降を始め、忠実に往路を下ったが、赤布とナタメのお蔭で、迷うことなくどんどん下れた。

栗山沢の二股に下り着いて、冷たい沢水で顔を洗ったのが五時だった。午後からしだいに雲が多くなった空からは、遂にポツポツ降りだしたが、ゴルジュを通過するまでは、幸いひどい降りにはならなかった。傘をさして車道へ出たのは五時四十五分だった。

この山は、沢から尾根に取りついてから勾配が急なことと、径らしい径がないせいで、標高のわりには予想外に時間がかかった。それだけに登り甲斐のある山と言えよう。

○芝草山 一三四一・六米 二・五万図「五里湖」「荒海山」

明神ヶ岳に登った前日の五月三日に登った芝草山についても簡単に述べておこう。この山は標高が僅か一三〇〇米台だが、中三依辺りから眺めると、藪山にしてはいかにも姿が

よく、雪でもあると特に目をひかれる。

われわれは中三依から入山沢の車道を歩き、中ノ沢沿いの林道を登って、右岸の標高一〇二〇メートル辺から林道を捨て、左方の尾根に取りついた。それは芝草山の東に喰い入る、かなり大きい沢の北岸の尾根で、これを登ると北からやや迂回する恰好になるが、その方が傾斜がゆるく登り易いと考えたからだ。右の沢をつめると、より早く三角点峰に取りつけるかも知れないが、上部は一面に笹藪で、案外時間がかかるだろうと看取した。

林道から尾根への取りつきは急傾斜のうえにアスナロの密林で、通過には困難をきわめた。だが尾根の上に出ると少し登りやすくなり、立木に印がついていたりした。尾根には一面にイワウチワが咲きみだれ、足の踏み場もないほどだった。踏跡らしいものは全くなかったが、藪は大したことなく、歩くのに楽だった。約一時間で小露岩が現われ、そこからは日留架岳の方がよく見えた。尾根の傾斜は地形図通りゆるくなり、ブナの古木の林床は笹が多く、たまにショウジョウバカマの花を見た。

尾根が東南に曲る付近の立木には一本に

「奥ノ角」、いま一本に「終点」と朱書されていた。そこからは芝草山の北々西の主尾根と、最高峰、その左の三角点峰がよく看取された。主稜線に出た所には残雪があった。そこからはっきり南折したが、主稜にも踏跡はなかった。小さなコブを一つ越え、顕著な峰に立った。南端まで行くと展望がよかった。ここは三角点峰より十数米は高く、芝草山の最高峰であった。三角点のあるのは想像した通りも一つ東南の峰であり、小露岩を下ってそこ迄行ってみると、果たせるかな綺麗な御影石の三等三角点標石があった。

この山のことを書いたものは見たことがなく、同行したO君がかねてから登りたがっていたので、定めし嬉しかったと思う。往路通り忠実に下った。

中三依から尾根の取りつき点まで二時間十五分、そこから山頂まで二時間半、帰路は山頂から林道まで一時間三十五分、さらに中三依まで一時間三十五分。一行六名。

平川氏追悼山行

斎藤 正

最近すっかり中年ぶとりが身について、肥れば肥るで心配になるし、少しやせれば、それはそれで気になる、いかにも四十台半ばといった感じの自分に嫌気がさしている。そんな小生ではあるが、年に二、三度は、突如として自分も驚く程山への憧れがふくらみ、どうにも抑えられない時がある。しかし所詮気持ちと身体のアンバランスはちよつと冷静になると避け難くのしかかってきて、出来上がったプランは——となると諸兄には到底「山行」

などとまともな顔をして報告できるものとならぬのは当然であろう。恥をしのんでいえば、昨年は西沢溪谷に青葉を涉猟し、北岳の大樺沢とバットレスの眺めを楽しみといった類いの話にすぎない。その中の一つが平川氏の追悼山行である。こんな言い方をすると亡き氏には申し訳ないのだが、久しく氏の碑を拝し

ていないことが気になって仕方なく、またあの前穂の頂きを眺めたくなっていた処に、遊ぶことにかけては(？)驚くべき才能の持主である加藤正巳君が突如小生の前に現れたという訳なのである。

加藤君は小生の一年後輩だが、何というか——やはり腐れ縁と言ふべきなのだろう——二、三年会わずにいて突然会っても昨年会ったばかりの感じで話が出来る誠に屈託のない良き友である。その彼とひよんな拍子で仕事のつながりらしいものが出来、暇になると小生の職場を襲っては(三井信託BKの先輩にはこの部分「秘」)駄ボラを吹き合う関係が復活したのだが、即座にこのフィクサーは、三森先輩と宮武君を同行の士として勧誘してきて、九月の敬老の日を前後して追悼「山行」となったのである。

——とまあここ迄は特に恥を忍ぶこともないのだが、ここからが些かならず問題となる処で、如水会館クラブで四人で打ち合わせの結果、(一)車でラクラク山行する。シンドイことは一切しない。(二)徳沢の小屋に泊ってゆっくり風呂へ入り、旨い酒を飲む。(三)道中、昔できなかった贅の限りを尽くす——の三方針を申し合わせた。それぞれの名誉の為に、これは全員の一致した意見であることを強調しておく。

そんな訳で九月某日、京王線のつつじが丘を三森先輩運転する加藤君の新車で出発と相成った。途中適度に遊びながら一時過ぎ中の湯着。この間、テリブル加藤の恐怖のドライブテクニックに、柏くんだりから早朝眠い目をこすって出てきた小生は、居眠りだにする余裕を与えられないハメになったのである。中の湯に車を預けてタクシーで上高地に入る。クライマーズザック一つという軽いいでたちながら、なにせ上記(一)～(三)の基本方針に基づいてバッグの中は余計なものがガッポリ入っている。三森先輩が秘かに手に入れた吟醸菊姫の一升ビンが背中揺れるし、重さだけは相当なもので、ヒイヒイ言いながらも、

そこは格好をつけて一ピッチで徳沢に入った。

この徳沢小屋——あれ程横を何度となく通ったものの、情けないことに、四人共只の一度たりとも中にすら入ったことのない夢の小屋という訳で、ガラリとした大部屋を半ば占領してザックを放り出すともう天国気分。ワイワイガヤガヤのバカ話ですぐ夕暮となった。やがて檜の風呂に入ると、これはもう最高。

窓越に前穂の東壁が拝め、夢心地でいいかげん湯当たりする仕末。呆けて出ると小屋のまじい夕飯で、これを前に例の菊姫を開け、し・こ・た・ま・き・こ・し・め・し・た・次・第。確かこの幻の酒は平川氏に久し振りに飲ませてやるものではなかったかと思うが、「他に二級酒も一本あるよ」という誰かの一言を聞くか聞かずの間に、酒はもう喉元深く入ってしまった。(平川氏勸弁！この次は特級もっていく)こうして貧乏に慣れた四人が清水の舞台から飛び下りた気分を立てた方針(一)(二)は遂行された。

翌日は敬老の日。「三森先輩に敬意を表しつつ」朝七時出発。新村橋で写真を撮りまくり、七時半奥又出合。ここでマズイ小屋の弁当を食べていると雨がショボついてきたが、あさましいものだ、気にもせず一気に食べた。こ

こから一時間半程で松高尾根取付に達した。

いいハイキングである。この頃には天気も我々を歓迎してきた。

何はともあれ四人手分けして早速に平川氏の碑を探すが、雪溪のある時しか記憶にないので合点が違いなかなか見当たらない。苦勞の末深い草付の急なガラ場を取付点から右へトラバースした処にやっと碑をみつけ、草をとり、踏み固め、碑を洗い、線香と花を手向けて黙とうの後、讃山賦を捧げた。勿論件の二級酒もたっぷりかけて……。そういえば氏は安酒の店は良く知っていたっけな。また教養の部誌に氏のプロフィールとして「その下町気分溢れるミッキーマウスの風貌は楽しめる」などと不遜なことを書いたっけ。改めて冥福を祈りたい。反省してます。

一段落していいよいよ重い荷を整理する時——方針(三)の実行となった。仙台白松羊かん、虎屋の羊かん、そして何と！三森宗匠の、前穂の岩壁を背にした野立て等々。(この時三森氏は本当にチャンチャンコを着て頭きんを被ったのだ)雪溪から汲み上げた水をラジュースで湧かし、宗匠の指導よろしく赤のもうせんをひいて怪しげなる手付きながらも平川氏

の碑に碗をかざしつつ飲んだあの茶の旨さときたら、こたえられないものではあった。

時折通りすぎる登山者が重荷に音をあげているその脇でこの贅沢。「やったぜ」——我が加藤君は年甲斐もなく喜悦の声を挙げたものだ。それにしても右岩稜の猛々しい岩稜、D沢奥壁の陰惨な壁、小屏風の如く何となく優美なABフェイス、王者の如き四峰正面——深い奥又白の谷の中に身を置くと、ただそれだけで心が安らぐ。

立去り難い気分を吹ききって、再び同じ道を徳沢へ下ることにした。というのももその中で中の湯へ戻り、蒲田川の畔りで野天風呂へ入る——という(二)の作戦の一部が残っていたからだ。明神池から対岸に渡り、散策を楽しんで上高地へ下る。途中岳沢の水を汲んで加藤君の特製スープを味わった。こういうことには奇跡的に気の廻る男だ。安房峠はテリブル加藤の運転をやめさせ、三森先輩の安全運転で平湯へ着く。早々に旅館を探して野天風呂へドボン。いつもながらこの気分はたまらない。ゴルフの後のビールのようなもの——とは宮武君の弁。

まことにせわしい山行で翌日は乗鞍ハイウ

エィを越えて帰京となったが、久し振りの乗鞍からの眺めもまた良かった。

こんな訳で、平川氏の追悼に名を借りた墮落的「山行」ではあったが、仕事に追いまく

書評

『藪山辿歴』

望月 達夫

岡田 昭夫

共著

望月さんの何冊目の本なのか、このほど「藪

山辿歴」という本が茗溪堂より刊行された。

先日、望月さんよりこの本の書評を針葉樹会報にのせるようにとのご依頼をうけ、大先輩のご著書の評などおこがましい限りだが読後の印象など会報の片隅をお借りしらせていただく次第である。

望月さんのこの本も、望月さんのお人柄を反映してか、いつもと同じようにとてもいいねいに仕上げられ、隅々まで著者の神経が行きとどいているのが感じられる。

られ、家庭に縛られ、徐々に衰えていく身を嘆く中年四人組の思い付きとしては、これがまあまあなのかも知れない。そのうちじっくり思いを遂げる機会もあろう。その時また加

昨今の登山ブームのためか、この方面でも売れっ子の著者の本など良くまあ山へ行くひまがあると思うくらい次々と本を出している。そのためだろうが、最初の本は仲々の佳品であつてもあとの作品になると、一つ一つの山行をじっくり見つめ醸すひまもなく原稿を書かされるせいか、これが同じ人の手になる本かと、読んでがっかりさせられるものがある。年に五十回山へ行つたとしても、書きのこしてみたい山登りはせいぜい十五回か二十回だろうし、一冊の本としてまとまった量の原稿に仕上げるのには相応の年月が必要なのではなからうか。

深田久弥さんですら、多分二年か三年に一冊ぐらいのペースでしか本を出していなかったのではなからうか。その点、この本はくりかえすようだが、或る時間をかけ、念入りにつくられ他の望月さんの著書と同じ質の高さを維持していて、安心できる出来栄である。

藤君がひよいとやって来て、「どっか遊びに行きましようか」などと言って、小生の一途な山への想いを攪乱せざることを祈つていよう。

次に感じた点だが、うらやましいことに望月さんはいつも良い山の仲間にくぐまれて登っているという点である。藤島さん、深田さんご健在の頃は、又とないこのお二人の先輩に村尾さん、近藤さん、柿原さんなどもまじえて、沢山の思い出多い山行を重ねられていたが、その後は横山さんご夫妻と、その仲間の山田さんと良く山登りを重ねられていたように記憶している。

そして、この本では岡田さん、野口さんという仲間との山登りが中心となっているようである。深田さん、横山さんはその著書の中で望月さんとの交流の様子を肌理こまかく描いていて、こちらにも読みながら一緒に山登りをしていようような気がしてくる。

今回の著作の仲間、岡田さん野口さんとの山登りも恐らくあのようになのしい雰囲気のものにちがいないだろうと拝察してはいるが、今度のご本は、あとにもふれるが念入りな歴

史的考証にすぐれている反面、そのような山登りの雰囲気がかがいが知ることにはあまりで
きず、望月さんが新しい山仲間とどんなに楽
しい山登りをしていらっしやるか、勝手に想
像するしかないのがいささか残念である。

この本は三つの地域つまり上州武尊岳西側、
長野原線沿線および中央線の日野春、長坂あ
たりのおよそ四十ばかりの山々と峠を歩いた
記録をまとめたものである。

共著者の岡田氏にはお眼にかかったことが
ないが、一九四五年のお生まれというからに
はまだ四十台、望月さんとはずいぶん年齢もち
がう筈だが息の合った山登りをしているらし
く見うけられる。望月さんの仲間とあれば、
矢張り相当に几帳面なお方のようで、念入り

に地誌・郡誌・村誌のたぐいを調べ、地元の
人に山名を確かめるなどの労をいとわず、こ
の本の内容を充実させているけれど、小生の
ようにずぼらでただ楽しく山へ登りさえすれ
ば良いというような人種にとっては、考証の
部分がすこし多すぎた分、山登りの人間くさ
い雰囲気が伝わってこない不満が残る。

もうすこしこれら地誌類からの引用は登り
ついた頂きや峠の様子を描くのに必要な場合
に限り、その分だけあたりの様子や仲間同志
の会話など（深田さんの本では、良く不二さ
ん、茂知さんとの会話が紹介され、楽しそう
な様子が伝わってきて読んでいても思わずほ
ほえんでしまうことがある）、つまりどんなふ
うにして登ったかというあたり、もうすこし

くわしく書かれているともっと楽しい本にな
ったのではなからうか。

小生も五十の声をきく頃となり、激しい山
登りはいささかためらうようになってきて、
心細いのだが、この本を読んでいるとまだま
だ先の楽しみが一杯あるなど励まされるよう
な気がする。

望月さんの年齢までは元気で山登りができ
るとすると、まだ大分色々な山に登れるなな
どと考えながら読み終えたが、願わくば健康
にめぐまれて元気でいつまでも山登りを続け、
ゆめ望月さんの著書でも『忘れ得ぬ山の人び
と』の方に書かれてしまわないように会員諸
兄も頑張っていただきたいものである。

（山本健一郎）

甲斐駒から光

佐薙 恭

若い頃南アルプスには行ったことがなかつ

た。OBになってしばらくしてから、ずっと
山を休んでいたの、自分にとって南アはい

わば処女地のまま残されていた。

甲斐駒から光までつなげて歩いてみよう、
と思いたったのは一九八二年夏の針葉樹会総

会の夜だった。隣席の山田亮三さんが杯を重
ねながら「今年仙・塩を歩くと南が全部つな
がるんだよ」と誇らしげに言われたのだった。
うらやましいという気持ちだが、自分もやって
みようという決心に変わっていったのは、その
夜相当アルコールが進んでからだだった。五十
才の夏であった。

早速机上プランニングに入った。その頃山

行を復活して四年目、復活山行回数も六十回を越してはいたが、日帰りや一泊の軽い山行が主であった。少し大きな山を対象としたのは一九七九年夏、笠・鷺羽、一九八〇年夏、黒戸尾根・甲斐駒あたりで、この辺が精一杯のところであった。どうせならテントをかついでいきたい。荷物ほどの位の重さになるのだろうか？毎日何を食べたらいいのだろうか？机上プランでは一回四、五日の山行として五回の夏休みで完成出来る筈であった。

しかし計画通りに事が運ばないのは会社の仕事だけではなかった。一年目には一番タフに思われた三伏・荒川三山を選んだのだが、会社の夏休みはあの破壊的だった一九八二年の台風十号の丁度一週間後にはじまった。鹿塩の宿に着くまで台風の被害があればほど大きいものとは知らなかった。中央線が不通になっていたので、流された富士川の鉄橋を眺めながら新幹線を使い豊橋経由入山したのだが、それほど荒れた富士川の上流がどこであるか、恥かしいことだがその時は思いが至らなかった。地元の人によれば、大井川や野呂川への下山は不可能。三伏だけが辛うじて上下出来るルートで、足止めをくっていた沢山の人が

熊の平や荒川方面から三伏経由脱出したばかりという。結局この年は計画を変更して鹿塩から歩きはじめ、ずたずたにこわれた道を拾いながら三伏・塩見を往復したにとどまった。塩川小屋は岩なだれに埋っていた。駐車中の何台かの車は見るも無残につぶされていた。本谷山あたりは出来たばかりの倒木の海でルートファイディングに気を使わねばならなかった。

それから毎年夏が近付いてくると、残された白紙の部分と、その年の仕事やプライベートな事情をにらみながら、今年はどういう風に？とあれこれ考えるのだった。目標を達成しようという気持ちはずっと持ち続けていたが、中だるみもあった。会社の夏休みは一斉休暇の形ではあるが、突発の仕事は遠慮なしに押しよせて来る。三十才台から四十才台の半ばまで米国勤務をしていて、日本国内での持ち家の手当てをしていなかったつけが廻って、最近二年半に三回も引越をする破目になった。そのうち二回の引越は夏にやってきた。一九八七年の夏は特にタイミングが悪く、とうとう夏山には出かけられなかった。また年頃の娘の結婚に関連した海外でのイベントも

或る年の夏だった。夏休み以外の機会をつかまえての計画消化もトライしてはみたが、余り実効はあがらなかった。

かくして五年計画も七年目に入ってしまった。漸く最後の白紙部分、聖平・光岳間を歩く夏が今年やって来た。休みの初日、八月十日、正午すぎ畑薙ダムでバスを降りた。激しい雨だ。バスの中でばったり会った旧知の柏原君（如水会員・四十年卒）も光まで小屋泊りで行くという。こちらはテント泊の予定だがこの降りではフレキシブルに考えよう。スタートの遅い初日はウソツコ沢小屋周辺まで、二日目はのんびりで茶臼設営、三日目は頑張っって日帰りで光岳往復、四日目は上河内岳から聖平まで歩きこれで計画完了、そのあと適当にオプショナルプログラムをこなして五日目夜には帰宅というのがオリジナルプラン。十時すぎ、ウソツコ沢小屋着。この雨の中沢筋にテントを張るつもりはもうとっくになくなっていた。空いてはいるが暗い感じの小屋だ。一緒に歩いて来た柏原君は「先輩のプランに合わせて御一緒に」と言いながら、実はあと二時間先の横窪沢小屋まで行きたそう。そうすれば彼にとって明日の光までの行

程が楽になる。彼は手持ちの日数が一日少ないのだ。いつもならこの時間帯はとくにアルコールを入れてくつろいでいる筈なのだが、この先高度差五百米を更につき合うことにする。十七時横窪沢小屋着。二十人位の先客。夜は益々激しい降りとなる。

翌朝五時過ぎ、沢の音を豪雨と感違ひしてためらっていたらしい柏原君より一足先にやや小降りの中出発。八時には茶臼小屋着。このまま休むには早過ぎるが光ピストンには多分遅すぎる。名案はないが、まあ雨足も強くなるみたいなのでテントを張ってもぐり込み明日のピストンの英気を養うこととしよう。柏原君は当然光小屋を目指して前進。「明日の夜はここで一緒に飲もうぜ。」長すぎる休養。天候回復の気ざしは全くない上に夕方激しい雷雨となる。柏原君は無事に光小屋入りしただろうか。

八月十二日三時起床。いつもの南アでの行動パターンだ。強い雨が降り続けている。出発予定の五時になっても一向に雨は弱くならない。こんな雨の中往復十時間も歩けるものか。声を出して「沈澱」と宣言してまた寝袋にもぐり込む。だが待てよ。ラジオの予報は

明日はもっと悪いと言っている。今日の沈澱

を正当化する言い訳はこの分では明日もきつと継続して存在する筈なのだ。二日も休めば今夏中の計画完了は危くなる。何か代案はないか？強い雨といっても夏の雨だ。日帰りピストンをあきらめて片道五時間ずつならへばらずに歩けるだろう。こわいのは雷だがまあ目をつぶろう。前日用意したピストン用のサブの他に寝袋と着がえを急拠追加パック。七時すぎ、少し雨足が弱くなったようだ。よし行こう。茶臼の岩峯、仁田池付近の草原、易老岳の樹林とひたすら雨の中を歩く。易老岳と三吉平の中間の奥秩父的樹相の処で、はじめて光からの登山者二人に会う。その一人が柏原君だった。「今晚茶臼では飲めなくなったよ。そのうち東京で。」十二時光小屋着。若い夫妻が小屋番。うれしいことに食事付。一息入れた後、依然続く雨の中を光岳山頂、テカリ岩、イザルガ岳、センチヶ原を歩き廻る。夕方のラジオでの天気図では九州の低気圧の他に新たに小笠原近くにも低気圧が発生、従って明日も悪いだらうと小屋番氏は言う。小さめの小屋に宿泊客は十一人。快適の部類だ。食事もよかった。しかし夜になっても激しい

雨の音が続いている。

八月十三日未明、不思議なことに雨はあがり窓から星が見える。富士山の左方から久しぶりの太陽が昇る。もう一度光の山頂へ行く。中アは勿論、北アが全部見える。南アは上河内岳・聖・兎が大きなマツスだ。その左端大沢岳のとんがりの更に左、仙丈だ。大無間、小無間、信濃俣、池口岳等日頃なじみの少ない形の山々が近い。負け惜しみのようだがあわただしい日帰りピストンではなくなったのでゆっくり帰りの道のりを味わいつつもどる。途中仁田岳へも遊びに行く。畑薙ダムが光っている。さつき出てきたばかりの光小屋の青い屋根がもう随分遠い。この辺りはポピュラーな南アの北部や中央部にくらべて実に静かで人かげもまばらだ。光も茶臼も、たった一人の山頂だった。昼近く一晩空き家にした茶臼のテントにもどる。ぬれ物を干し日光浴をする。テントのまわりに蝶が沢山飛んでいる。こげ茶のベースにオレンジの模様の蝶だ。撮った写真から「ベニヒカゲ」という蝶だとあとで会社の蝶好き青年に教えてもらった。翌八月十四日、山行五日目、予定では下山し帰宅する筈の日だが今日中には帰れない。

計画達成が優先する。三時起床、テントをたたみ四時行動開始。まだ暗い。今日も雨ではない。東の空に富士のシルエットが大きい。鮮かなライトの固りは五合目だろう。六時少し前、最後のピーク上河内岳に立つ。ここも又たった一人の山頂だ。丁度ガスにつつまれ山頂からの眺望はゼロ。その分逆に物を想う。過去何年間か無事に南アの山々を歩くことが出来た幸運を、お蔭様でと感謝したい殊勝な気持ちになる。七時半聖平着。これで甲斐駒・光はとうとうつながったのだ。予定日数を越えたので目の前の聖岳再登と長い遠山川下りのオプションはギブアップ、聖沢ルートを下る。十三時榎島着。何はともあれ先ずは冷いビール。ここは何回か泊っているので今回は敬遠してリムジンで二軒小屋へ。立派なロッジだ。風呂。珍しい鹿のさしみて一人で祝杯。夜同室になった東京昭島市の小林さんは伊藤恙生先輩の山の知人ということがわかった。五十七才、大きなキスリング、明日から一人で、荒川、赤石、聖を山中二泊でかけ抜けるという。そのバイタリテイに敬意を表し、安全と成功を祈って乾杯する。

一日超過の六日目、八月十五日。轉付峠を

越える。ガスっていて峠からの眺望は全くなし。又来ればいいさ、と自分に言いきかせながら降り出した雨の中を田代入口へ。すぐに身延へ出ずバスで反対の奈良田へ行き村営温泉で一風呂浴びる。又激しくなった雨の中を終バスで身延へ。更にJRを乗りついで富士、横浜経由帰宅する。靴ずれの痛い足を引きずりつつ自宅下車駅上星川駅についたら外出からもどって来たわが女房も一緒の電車であった。「どうだったの?」「雨だったけどやったさ」「そうお、好きねえ」

こうして懸案だったわが「甲斐駒・光」は五十六才の夏とともに終わった。

以下、南アルプスでの足あとを振り返って見ると、

① 一九七八・十一月 夜叉神峠・高谷山。

同行者、甘利、高崎。アメリカカボけの生を甘利が白峯三山を眺めに連れていてくれた。北岳稜線に舞う雪煙を見て、また山登りをしたいという気持ちかわいて来た。この山行がなかったら今頃まだ下手なゴルフなど続けていたのだろう。

② 一九八〇・八月 黒戸尾根・甲斐駒・

北沢峠・戸台。スーパー林道開通前の夕フな甲斐駒だった。前夜竹宇で仮泊。次が七丈泊りと慎重に取り組んだ。

③ 一九八二・八月 三伏・塩見(前出)

④ 一九八二・十二月 鳳凰三山。御座石と鳳凰小屋に泊り夜叉神へ抜けた。

⑤ 一九八三・八月 三伏・荒川三山・赤石・榎島。前年の台風のダメージはまだ修復されず、東海パルプのリムジンはなし。そのため入山者少く静かな山行だった。毎日午前中は快晴、午後は早くから雷雨というパターンだった。

⑥ 一九八四・八月 榎島・聖岳・赤石・榎島。道路が漸く直ったので入山者多く大にぎわい。テント場確保に苦勞する程であった。全行程中殆ど雨は降らず。

⑦ 一九七四・十二月 地藏岳・高峯。初日鳳凰小屋入り。冬をかつき早川尾根經由北沢峠・戸台へ抜ける予定だったが、忘年会続きで入山直前までの深酒のせいで体調不調。高峯で戦意を失い引返す。好天だったが寒かった。

⑧ 一九八五・六月 夜叉神・鳳凰三山・白鳳峠。同行者、三菱スポーツクラブ友

人吉沢氏。白鳳峠下りからの北岳が素晴
しかった。

⑨ 一九八五・八月 両俣・野呂越・三峯

岳・間・農鳥・広河内岳・奈良田。日数
の制約があったので両俣、農鳥と小屋に
泊り小山行にした。終始雨の中であった。
身延駅で夕方電車待ちの頃、あの日航機
がこの辺りの上空を迷走して群馬県へ向
かったことを自宅へもどって知った。合

掌。

⑩ 一九八六・七月 北沢峠・仙丈・野呂

越・両俣・仙水峠・早川尾根・白鳳峠。
七月末の小夏休み三日間をフルに使った。
好天。仙丈岳カールと仙水峠でテント泊。

⑪ 一九八六・八月 三伏・塩見・蝙蝠・

三峯・間・北岳・広河原。同行者、山本
健一郎氏。塩川での小屋泊りの他は三
伏・雪投沢・北岳とテント泊。全行程好

天。山本氏の学生時代からの、更に一層

の道具マニア振りには脱帽。井川メンパ、
ドイツ製コップフェルなど珍らしかった。

⑫ 一九八八年八月 茶臼・光往復・上河
内岳・聖平・転付峠。(前出)

以上同行者の特記のない山行は何れも単独
行。

インカ・トレイル

斎藤 正

ケーニヤの物悲しい音色が耳にしみついて、
僕ははるばるこの地へやってきた。地球の裏
側という表現は陳腐ではあるけれども、文字
通り、その位置関係を正しく示している。

この遙かなる大陸が連想させるものは、ア
マゾンの密林であり、激しいサンバのリズム
であり、南極に程近い厳しい氷の世界であっ

たりするだろうが、私にとっては、インカの
後裔の姿であった。正確に言えば、後裔では
なくて、その時代のままのインカの世界をの
ぞいてみたいという気持ちが強かった。

埋もれた民族。かつて華々しい繁栄を誇り
ながら、今は、虐げられた民族として、他の
民族の支配下にある人々。そんな民族をのぞ

いてみたくなる。愁いを秘めたまなざしが無
性に恋しくなる。

山の中に入って、自分の持てる力を全て出
し切って自然に対峙することも好きだが、そ
のふもとに生活する素朴な人々に接すること
も魅力的だ。

前回、八七年二月にアジアを周遊したとき
の経験から、チケツトは日本が一番高いとい
う印象が強く残っていたので、今回、日本で
購入するチケツトは、ロス往復とし、そこか
ら先は、現地を買うことにした。ちなみに、
日本でリマまでのチケツトを通して買うと、
一番安いもので、二十三万円前後ということ
だった。

私は、ロス往復九万五千円、マレーシア航空利用のチケットを購入した。ロスでのエージェントは、ロンリー・プラネット社のガイドブックと、生協から出ている、国際学生証利用の手引きというパンフレットを参考に選んだ。ロス到着と同時に、けっこう重いリュックを背負ったまま、UCLAのあるウエストウッドへ出向いた。

東京でいきなり細かい住所を聞いてもなかなかわからないように、五、六人聞いて、ようやく目当ての場所を探すことができた。三、四人の小さなオフィスで、幸い、余りこんでおらず、私のへたな英語につきあってくれた。スチューデントプライスで、直行便が七五〇ドル。マイアミ乗換えで七〇〇ドルということで、期待していたより、大分高かったが、安い方のチケットを買った。それでも、トータルで十九万円前後なので、日本で買うよりは四万円位安かった。

翌朝八時半のフライト。時間がないが、五年卒の加藤博行OBに連絡をとり、すしをこちそうになった。加藤さんのお宅が空港からは遠いということと、私が高いホテルに泊る気が全くないため、空港でビバークするこ

とにし、空港まで送っていただいた。個人山行でステーションビバークするのと全く変わらない。

ペルーの首都リマへ着いてから辞書を買い、クスコ行のチケットを買い、安宿へ移ったりして、二、三日過ごした後、三三年卒の丸山則二OBに電話で連絡をとる。クスコ行のフライトが翌日午前七時だったので、自宅夕食をこちそうになった後、車で安宿まで送ってもらう。

今回の旅のメインテーマである、インカ・トレイルのトレッキングについて、ガイドブックにも記されていたことだったが、治安という面から、一人で歩くのは非常に危険だという忠告を丸山さんからいただき、クスコでパートナーを探すことに決める。

クスコは、標高三四一〇メートル。リマの標高が百五十メートル程だから、三〇〇メートル以上を一時間のフライトで登ってしまふことになる。

リマから一緒だった一人旅の女子大生が、機内から体調がすぐれず、ついに、クスコの空港でダウンしてしまう。クスコでレストランを経営している日本人が迎えに来ていると

いうので探してみると、果たして、その人がいた。事情を話すと、シュラフでよかったら、私も泊めてくれるという。

宿が決まって、同行者を探すべく、ツーリストインフォメーションや、安宿に出向くが、なかなかパートナーが見つからない。そうこうしているうち、灯台もと暗しで、同じアパートに居候している、八幡さんという人が一緒に行ってくれることになる。

彼は日本を出てから九年目になるという、筋金入りの貧乏旅行者で、サハラ砂漠を自転車で横断したこともあるという、なかなか頼もしいパートナーだった。スペイン語も私の英語位は通じるので、ずい分楽だった。

インカ・トレイルの起点となるのは、クスコからマチュピチュへの鉄道の途中に位置する、km 88という駅だ。この駅で十人程のトレッカーが下車する。少人数のトレッキングは盗賊にねらわれやすいと、しつこい程ガイドブックに書いてあるので、オランダ人の三十才位のカップルが同行しようといい、結局四人連れで歩くことになる。

テントやコンロは、八幡さんのものを借りて、私はシュラフとマットだけを、クスコの

トレッキング専門店で一日一ドル、それに、トラベラーズ・チェック五十ドルをデポして借りた。余り品質のよいものではないが、僅か三日間のために持参するよりは、借りたほうが楽だろう。

ネパールでのトレッキングに比べて、テントを持参する必要のあること、生活者の使う道ではなく、トレッカーのみの道であることから、こちらのほうが、山登りに近い印象を与える。

標高差も、起点のkm 88が、約二五〇〇メートル、最も高い峠が四二〇〇メートル、終点のマチュピチュが二四〇〇メートルと、結構起伏にとんでいて、山登りらしい雰囲気がある。途中十カ所程のインカの遺跡が残っており、歩いてしか見に行くことができず、まだ余り人の目にふれていないかと思うと、遺跡好きではなくても、何となくひかれるものがある。

八幡さんの装備は、テントが、合衆国東海岸にあるMO・SSという会社の二人用で、フライが本体とバックルで合体し、感動的に居住性のよいものだった。コンロも、我々が合宿で使っていたオプティマスと同じものだ

ったが、プレヒートなしで圧力をかけられるポンプを併せ持っていて、夏には、重宝するだろうと思われた。

全部で二泊三日の行程であったが、初日は、四二〇〇メートルの峠への登りの途中、四〇〇メートル付近での幕営となった。

私たちは、当初四人で歩いていたが、途中から、アルゼンチンの男性三人と、アメリカ人で、スペイン語をベネズエラで勉強中だという、ちょっと小太りだがなかなかかわいい女の子の四人連れと一緒に、計八人が、同じ天場で幕営することになった。あいにくの曇り空で、時折思い出したように雨が降る。ペルーの地酒であるピスコを飲みながらたき火を試みるが、結局煙だけで終わってしまった。心地良く酔いながら、快適なテントで眠りについた。

翌朝目ざめると、早起きの八幡さんがブツブツ言っている。何があったのかと思ったら、木につるしておいたパンを、牛に食われてしまったという。俄には信じられなかったが、確かに、昨日、牛がテントの回りを徘徊していたし、ビニールの残りが木の根もとに残っている。食糧は充分すぎる位持ってきてい

たので、さして興奮することもなく、チーズとハムとコーヒーで朝食をすませる。

峠はすぐ近くに見えたが、なかなか届かず二時間近くかかる。昨日は出だしに、二つ程遺跡があっただけだったが、この日はちょうど一ピッチ歩くと、遺跡が出てきて興味深い。広いカール状の谷に降りて、二つ目の峠へ向かうところから、道が石畳となって、歩きやすい。はっきりしなかった天気も回復してきて、午後四時頃プエタマルカという遺跡に着いて幕営する。ここは、かつての給水システムが今でも機能していて、規模もこれまでで、一番大きい。月夜になって水の流れを聞きながら、あすのマチュピチュを思う。

二日の山歩きを経て、あと峠を一つ越えればマチュピチュが見える。時間の問題かと思っていたら、何とも無気味な看板に出会う。

「蛇に注意」

自慢でも何でもないが蛇は苦手である。それらしく藪も深くなり、恐る恐る足を踏み出しながら、ようやく最後の峠に出る。

出ると同時にマチュピチュの全景が目に入る。

高校の英語の教科書に紹介されていたこの

遺跡の姿を感動を伴って見るために、私はわざわざ山道を歩いてきたのかもしれない。ひねくれ者の私は、人の大勢訪れる観光名所に未だかつて感動を覚えたことがない。人が多いというだけで、もう感受性がほとんどなくなってしまうのだ。

マチュピチュも日本から遠いとはいえ、大勢の観光客が訪れる観光地に違いなく、遺跡のすぐそばには、南米一高いといわれるホテルも建っている。本来なら食指の動かない場所であるのだが、インカ帝国征服にまつわる悲しい物語が、頭の中にこびりついていて、どうしても訪れたい場所だった。だからできるだけ感動的にこの観光地を訪れたかった。果たして、二日の山歩きの後、一番列車が到着する前に、ひそやかなこの遺跡を目にした印象は、悪しき観光地のそれをまぬがれたものだった。

一つ一つの遺跡を几帳面に漁るだけの繊細さは私にはなく、ただその一角に横たわって昼寝しながら、遺跡というよりも自分自身の感慨にふけりながら、日の高い時間を過ごし、この遺跡のふもとに開かれた温泉宿までかけおりました。

卒論に追われるまま、大した計画もたてずに飛びだしてきたので、唯一の目標ともいうべきインカ・トレイルのトレッキングが終わってしまつと、もうあとは何をしようというプランもなかったし、逆に行ってみたい場所が多すぎて、一つに絞ることが難しかった。

マチュピチュからクスコへ帰って、安宿にチェックインしようとしているとき、一人旅の女の子が、たどたどしい日本語で盗難にあったと話しかけてきた。夜道がこわいから警察まで一緒に行ってくれないかと。

父親が日本人で母親がブラジル人だという彼女は、日本人と同じ顔はしていても、さすがにしっかりしていて泣き出したりはしない。僕らは彼女と一緒に警察へ行き話を聞いた。パスポート、クレジットカードからトラベラーズチェックまで盗まれて、あと現金が一〇〇ドルあるだけだという。

クスコからブラジルへは、ボリビアを経て、陸路でつなぐことができるので、もしボリビアが通れるなら、陸路でブラジルへ抜けるという。一〇〇ドルあれば足りなくはない。だめだったら、リマへ飛んでカードやパスポートの再発給を受けるといふ。

クスコのボリビア領事館は既に閉鎖されてしまっていたので、チチカカ湖のほとりにあるプーノという街まで行かなければならない。僕らは、プーノまで同行することにした。プーノに着いたのは金曜の晩。土、日は領事館も休みなので、葦の浮島として有名なウロス島を経て、タキールという静かな島まで一緒に行く。

この静かな島で僕らは別れた。ビザがとれなかったら、また戻ってくるという言葉を残して彼女はプーノへ帰って行った。

後から届いた手紙によると、どうやら無事に帰れたようである。

私はもう一度会えればいいな、と思いつつ、観光客も少ない素朴な人々の住むこの島で、残り少なくなった旅の日々を過ごした。

あとはもう帰るだけだな、と思っていたのだが、プーノでリマからロス行きのチケットのリコンファームをしようとして、間違いに気付いた。メイとマーチを間違えて予約してあったのである。出発まで何日もない便を今から予約できるかどうか不安に思いながら、まず、アエロペルーのオフィスのあるフリーアカという街まで車をとばし、そこではできな

いというので、リマ行の翌日の便を押えた。

幸いなことに、リマでは当初の予定していた便は満席でだめだったが、それより二日早い便、私がリマへ着いた日の翌日の便を押えることができた。

結局、ロスで一週間近く滞在するはめになり、することとてなく高くてまずいめしを食っている、四万円けちったは間違いだったかな、などつまらぬことを考えてしまった。

実際三〇日の旅程のうち、八日程をただ乗換えのためにロスで過ごすことになったのだから、何とももつたないことをしたといえる。その間の滞在費を考えれば、乗換えに無駄がないように、四万円高いチケットを東京で買っていけばよかった。安くあげることには価値があるような気になって旅をしていたが、あり余る時間のなくなった、今になって考えてみると、どうもつまらない所で金をケチッてしまっていたなと思うのは、既に学生の気分を失ってしまった証拠だろうか。

丸山さんと加藤さんのお宅には、それぞれ帰りにもお世話になり、突然お邪魔したにもかかわらず、暖かく迎えていただき、ありがとうございました。

会務報告

昭和六三年度総会は六月二十九日(水)夕刻より如水会館にて開催されました。OB出席者三九名(委任状四九通により成立)および学生八名の参加を得、盛会となりました。当総会にて審議・承認された事項は次のとおりです。

一、昭和六二年度 活動報告

(1) 懇親山行

イ 春の山行(五月十四日～五月十五日)

安達太良山

(2) 会合

イ 評議員会(六月十七日)

ロ 総会(六月二十四日)

ハ 新年会(一月二八日)

ニ 幹事会(六月十日)

(3) 出版物

イ 会報(第69・70号)

ロ 会員名簿(一九八七年度)

二、昭和六二年度 決算(後表)

三、昭和六三年度 予算(後表)

四、昭和六三年度役員および幹事

(1) 会長 石井左右平

(2) 副会長 石原 脩

(3) 評議員

岩崎 利一 甘利 仁郎

根本 大 上原 利夫

小林 茂雄 沢木 一夫

樋口 洪 中橋 寿雄

石井左右平 岡田 健志

田中 一雄 俵 昭

笠原 広信 前神 直樹

石原 脩 浅田 充

(4) 幹事

代表幹事 西牟田伸一

総務 岡部 寛史

会 安島 孝知

会 岡部 晃和

会 稲毛 尚之

会 引地 真

山 宮下 克彦

行 近藤 泰

学生担当 米田 篤裕

佐藤 活朗

中西 茂

山本礼二郎

保 険 稲毛 尚之

(5) 監 事

山本健一郎 竹中 彰

(6) 新入会員紹介

川名 真理 斎藤 誠

河野 正

五、昭和六三年度 活動予定

(1) 懇親山行

イ 夏の山行(八月)

ロ 冬の山行(三月)

(2) 会 合

イ 評議員会

ロ 総 会

ハ 新年会もしくは忘年会

ニ 幹事会

ホ 学生合宿報告会

(3) 出版物

イ 会報二回発行の予定

ロ 如水会会報投稿

◇ ◇ ◇

本年度総会の後、近藤恒雄会員(昭4卒)

より当会に対し、百万円の寄付のお申し出がありました。当会として、ありがたく受け入れることにいたしましたので、ご報告申し上げます。なお、この取扱いにつきましては、

来年度の総会において決算の承認をいただくこととなりますが、遭難対策基金に繰り入れさせていただくことになると思われます。

(総務幹事 岡部寛史)

◇ ◇ ◇

細野伸二君遭難事故について

会長 石井 左右平

すでに学生により仮報告書が会員各位に送られておりますので、詳細ご存知の事と思われませんが、事故の概要と当会の対応につき、左記のとおり報告いたします。

一、事故の概要

八月十二日 午前五時十分頃 剣岳源治郎尾根I峰平蔵谷側壁中央ルンゼルトの取り付き付近の雪渓にて、夏山合宿中の山岳部員細野伸二君(法学部三年)が滑落し、ラントクルフトに転落、頭部を強く打ってまもなく死亡いたしました。

二、救助活動

その時付近にいた他パーティー、富山県警山岳警備隊の救助により、遺体はすみやかにヘリコプターにて富山県上市町に運びこまれました。

細野君のご家族は、実家のある埼玉県より車にて、現地に向かわれました。当会か

らは石山岳部長(S36卒)、西牟田代表幹事(S47卒)、河野会員(S63卒)がそれぞれ現地向かい、処理にあたりました。

三、通夜・葬儀

埼玉県の細野君の実家にて八月十三日通夜が、翌十四日告別式がそれぞれ執り行われ、会員多数が参列いたしました。

四、費用等

当会から遭難対策基金より約六十万円を救助費用、援助いただいた他パーティーへのお礼等のため取りあえず用立てしております。保険金の清算がまだ済んでいませんので、それが済みましたら、会計幹事よりあらためて報告いたします。また、葬儀にあたり、各会員よりの香典はひかえ、会として十万円の香典をお供え致しました。

以上でご報告といたしますが、今回の事故にあたり、ご協力いただいた警察、各山岳会の方々、また、事後の対応に多大のお骨折りいただいた会員の方々に、あらためて御礼申し上げます。

最後に、故細野伸二君のご冥福を心よりお祈り申し上げます。(一九八八・九・二〇)

昭和62年度 決算

1. 一般会計 (昭和62年6月1日～昭和63年5月31日)

収支計算書

(円)

支 出	金 額	収 入	金 額
会報発刊費	309,300	納入会費	1,058,000
総務費・雑費	167,300	雑収入	88
山岳部活動補助	250,000	前年度より繰越	57,473
山岳部保険料	65,520		
通信・連絡費	172,800		
その他	150,000		
次年度へ繰越	641		
合 計	1,115,561	合 計	1,115,561

支 出 会報発刊費 第69号 141,000円；第70号 168,300円
 通信連絡費 送代 150,000円 連絡費 22,800円
 その他 補填修正分 150,000円
 山岳部活動補助 使用明細は学生会計担当より報告
 収 入 納入会費 96名 1,058,000円 (前年 596,000円)
 (過年度分 72名 524,000円 当年度分 82名 534,000円)

2. 遭難対策基金 (昭和62年6月1日～昭和63年5月31日)

収支計算書

(円)

支 出	金 額	収 入	金 額
学生保険料	65,520	前年度末基金有高	3,510,802
当年度基金有高	3,552,006	学生保険料 (一般会計より)	65,520
		利息収入	41,204
合 計	3,617,526	合 計	3,617,526

運 用 ワリサイ (日債銀)

昭和63年度 予算

1. 一般会計 (昭和63年6月1日～昭和64年5月31日)

収支計算書

(円)

支 出	金 額	収 入	金 額
会報発刊費	360,000	納入会費	1,000,000
総務費・雑費	100,000	雑収入	1,000
山岳部活動補助	250,000	前年度より繰越	641
山岳部保険料	70,000		
通信・連絡費	200,000		
次年度へ繰越	21,641		
合 計	1,001,641	合 計	1,001,641

2. 遭難対策基金 (昭和63年6月1日～昭和64年5月31日)

収支計算書

(円)

支 出	金 額	収 入	金 額
学生保険料	70,000	前年度末基金有高	3,552,006
当年度基金有高	3,658,006	学生保険料 (一般会計より)	70,000
		利息収入	106,000
合 計	3,728,006	合 計	3,728,006

運 用 ワリサイ (日債銀)

住所変更および名簿訂正

卒業年度 氏名

- 19 鈴木 肇 自 宅〒145 大田区東嶺町38-12
- 23 島影 礼一 自 宅〒103 中央区日本橋人形町2-26-8
- 24 笠原 広信 自 宅〒186 国立市中1-20-42 ヴィラ国立
電話 0425-73-84-96
- 25 佐藤 勇 自 宅〒178 練馬区大泉学園町1-13-32
- 27 横山 皖一 自 宅〒414 伊東市宇佐美萩ヶ窪3399-203
- 28 渡辺 幸信 勤務先〒160 新宿区西新宿1-25-1-38F ファインクレジット(株)
- 30 白川 隆夫 自 宅〒114 北区東十条3-3-1-516 電話 03-927-4781
- 31 石和田四郎 勤務先電話 03-592-4040
- 34 宇田川徳治 勤務先〒401-03山梨県南都留郡河口湖町船津4932マルフル(株)
電話 0555-72-1980
- 36 石 弘光 自 宅〒171 豊島区雑司が谷1-36-12
- 38 倉知 敬 自 宅〒260 千葉市真砂2-16-1102
- 39 蛭川 隆夫 自 宅〒215 川崎市麻生区王禅寺2657-47
- 40 小野 肇 自 宅〒064 札幌市中央区南13条西18丁目
- 41 石田 信隆 自 宅〒281 千葉市小仲台8-22-8-404
- 48 井草 長雄 自 宅〒359 所沢市神米金 358-13郊外マンションG-406
- 52 浅田 充 自 宅〒232 横浜市南区別所中里台24-1-C-410
- 58 岡部 晃和 自 宅〒272-01千葉県市川市末広1-12-13 エステート渋谷 205
電話 0473-99-5992
勤務先 日本債券信用銀行審査部 電話 03-263-1111 ex. 3145
- 59 稲毛 尚之 自 宅〒167 杉並区南荻窪3-29-23 三菱倉庫荻窪寮
電話03-332-8760
勤務先 三菱倉庫(株)国際第一部第一課 電話 03-278-6543

新入会員

- 63 河野 正 自 宅〒226 横浜市緑区鴨居4-32-14
- 63 川名 真理 自 宅〒113 文京区千駄木2-20-50江原方
勤務先 ネクサス 電話 03-423-1611
- 63 斉藤 誠 自 宅〒274 船橋市高根台1-1-2-457
電話0474-62-0247
勤務先 日本交通公社団体旅行日本橋支店 電話 03-273-1932

編集後記

今年の夏は、夏らしい時期がないまま過ぎてしまいました。皆様方の夏山はいかがでしたでしょうか。雨の山もたまにはいいのですが、出かけるたびに雨では、天を恨みたくなくなってきます。

次号は来年二月に発行の予定です。今年の夏山、秋山の成果等々の投稿をお待ちしています。

第67号より会報幹事を担当させていただきましたが、また日本をしばらく離れることになりました。つきましては、次号の原稿は本年末までに宮下幹事（昭57卒）までお送りいただくようお願いいたします。

（引地 真）

